

櫛形町文化財調査報告 No- 11

鎌物師屋古墳

—— 櫛形町道 5 号線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 ——

1994

櫛形町教育委員会

序 文

櫛形町下市之瀬は、本町の南縁部に位置し、坪川をはさんで隣接する甲西町塚原と共に、従来から多くの古墳が存在する地区として知られていました。

本町では、新長期総合計画に基き、町中央を南北に縱断する櫛形5号線の建設を計画しており、平成5年度には、下市之瀬地内において着工することになりました。この予定路線内には、たまたま鎧物師屋古墳がかかっていました。この古墳は、昭和29年に既に破壊されておりましたが、その一部がいまだ地下に埋没している可能性が強かったために、今回、関係各位のご協力により、発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、石室の基礎構造の一部や、供献された遺物の一部を得ることができ、また従来円形と考えられていた古墳の形が、方形であったなど新しい知見を得ることができました。

これらの新しい知見は、町民が自らの歴史や文化を知り、さらに発展させる糸口として、大きな意味を持つものと考えております。

最後に、今回の調査、ならびに報告書作成にあたり、ご指導、ご協力下さった皆様に心から感謝申し上げる次第でございます。

平成6年3月

櫛形町教育委員会

教育長 沢 登 孝 弘

目 次

序 文

例 言 (凡 例)

第Ⅰ章	調査に至る経緯と経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	これまでの調査	1
3.	調査の経過	1
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	2
1.	遺跡の位置	2
2.	周辺の遺跡	2
第Ⅲ章	調査の概要	5
1.	鋳物師屋古墳	5
a.	形状と規模	5
b.	内部構造	5
2.	出土遺物	9
3.	周辺の遺構	9
a.	土壤	9
b.	溝状遺構	9
第Ⅳ章	ま と め	12
引用・参考文献		13
報告書抄録		13

挿図目次

第1図	遺跡周辺地形図〔1/3000〕	3
第2図	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図〔1/25000〕	4
第3図	遺跡全体図〔1/450〕	6
第4図	古墳周溝・南北壁セクション図〔1/80〕	7
第5図	石組〔1/40〕	8
第6図	出土遺物〔1/3〕	10
第7図	土壤・溝状構・ピット群・北西壁セクション図 〔1/50・1/100・1/500・1/200〕	11

図版目次

遺跡遠景	図版1
石組（東より）	図版1
石組（北より）	図版1
周溝（南部）	図版2
4号土壤	図版2
1号溝状構	図版2
出土遺物	図版2

表目次

第1表	ピット規模	12
-----	-------	----

例 言

1、本書は、平成5年度に行なった櫛形町道5号線内遺跡発掘調査の報告書である。

2、遺跡は、山梨県中巨摩郡櫛形町下市之瀬字横道下に所在する。

3、調査を実施した年月日は以下の通りである。

現地調査 平成5年11月4日～同年12月3日

整理作業 平成6年1月～同年3月31日

4、調査組織は以下の通りである。

調査主体 櫛形町教育委員会

調査担当 清水 博（櫛形町教育委員会）

調査事務 櫛形町教育委員会

5、発掘作業参加者

相川はるみ、相川みさえ、妻場うき乃、甘利千恵子、石川千恵、川崎しげみ、桜田和子、桜田定子、桜田みさえ、桜田みさ子、長沼豊子、入倉妙子、入倉とら江、アレクサンダー・イエム

6、整理作業参加者 福田礼子、若林初美

7、本報告書作成の業務分担は下記の通りである。

第I～IV章－清水、遺物の実測－福田、遺構図トレース－若林

8、本書作成にあたり下記の方々から、ご指導・ご助言をいただいた。記して謝意を表す次第である。

小野正文、保坂康夫（山梨県教育庁学術文化課）、田代孝、新津健、出月洋文（山梨県立埋蔵文化財センター）、杉山人蔵（町文化財審議委員会副会長）

9、発掘調査によって得られた出土遺物、記録図版及び写真等は櫛形町教育委員会において保管している。

凡 例

1 遺構実測図の水系レベルは海拔高を示す。

1 遺構図中、遺物は大数字で遺物番号を、小数字で底面からの高さを示す。大数字は本文、挿図と一致する。

1 遺物図面中、スクリーン・トーンは須恵器を、△-△は軸の範囲を示す。

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

櫛形町では、新長期総合計画に基づき、居住環境などの基盤整備を進めてきた。その一環として町内の道路網の整備に努め、町を縱断する櫛形5号線の建設を計画した。同路線は平成5年度において、櫛形町下市之瀬地内から建設を開始し、順次北へ向う予定であった。

この道路の路線内にあたる下市之瀬字横道下には、かつて鎧物師屋古墳が存在していた。この古墳は、昭和29年に旧農道工事に伴ない破壊されていたが、その周溝及び基礎などは遺存している可能性が強かった。そのため事業課から埋蔵文化財の取扱いについて問合せを受けた同教育委員会では、発掘調査が必要である旨の回答をおこない文化財保護法に基づく埋蔵文化財調査を実施することとなった。

2. これまでの調査

この鎧物師屋古墳は、昭和29年2月に当該地における農道工事に伴ない埋立用石材、石垣用石材等を得るために崩されている。その折、地元の甘利亀雄氏（峡西中学校長一当时）によって調査がなされている。

当時の諸記録類は残念ながら散逸してしまったが、本町文化財審議会副会長の杉山人藏氏も調査に参加され、その時のメモを残されている。以下はその調査時のメモである。

概況 塚高3m、塚径（基部）15.2m、石室狭道入口幅2.4m、玄室長4.6m、奥壁幅1.35m、石室は南北に長く入口は南面。石材は附近（市之瀬川）のもの。側壁には、内面平らな50m～1m余りのものを用い、床は10～15cm径の玉石を敷き、上に小礫が厚さ10cm程敷かれ、さらにその上に桜の樹皮が敷かれていた。

出土品 鐵鎌2、短刀1、刀子1、直刀残欠、土師器須恵器片、人骨。

以上、遺物、記録類を失なってしまったのは残念であるが、古墳の概要を知るには遺重なメモである。それによれば、径15m程の、内部に横穴式石室をもつ古墳で、出土品等からも典型的な後期群集墳と思われる。

この周囲には、畑に礫を用いた塚が多く認められ、古くから積石塚の可能性も指摘されていた。鎧物師屋古墳東南方200m程のところに工業団地を造成する折にも、発掘調査に先だって地内の塚30数箇所にトレンチを入れて確認を行った。しかし該地は礫の多い扇状地で、全て耕地造成時に礫を積み上げたものであった。

3. 調査の経過

発掘調査は平成5年11月4日に開始した。発掘区は、古墳を含んで長さ60m、巾14mに亘り約800m²に及んだ。

古墳は、まったく削平されていたが、その跡地はほぼ楕円形に畑地として痕跡を止めていた。そのため当該畑地内に2ヵ所程試掘トレンチを設定し、耕作土及び遺構面までの深さを確認した。その観察に基づき、地表下約20cm程を重機によって排土し、以下を人力によって精査しつつ掘り下げた。

古墳については後に詳述する様に基底部の約1/3強を確認することができた。古墳以外では、ビット、溝等を検出した。遺構確認面はかなり擾乱を受けており、良好とはいいがたかった。

調査は12月3日に終了し、同日山梨県教育委員会学術文化課の確認をえた。

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

鎌物師屋古墳は、櫛形町下市之瀬の扇状地上に占地している。

櫛形町は甲府盆地の西縁にあたり、地形的には概略、御勅使川・滻沢川がつくる扇状地上にある東半部の平地帯と、櫛形山山麓である西半部の山付地帯からなっている。この櫛形山を首座とする巨摩山地の西側には早川の急谷を挟んで赤石山脈（南アルプス）がひかえている。この赤石山脈や巨摩山地は、糸魚川一静岡構造線の一部をなしており、櫛形山東麓にも幾条かの断層崖地形を刻んでいる。町中央に三角形状に拡がる市之瀬台地も、甲府盆地形成に与った断層運動によって生じたものである。台地前端は100~120mの比高差を持つ下市之瀬断層崖によって平地部と画され、先端はこの断層運動によって生じた小高い円頂丘が並んでいる。台地上面は標高400~500mを測るが、この円頂丘から逆傾斜面を経て、なだらかに起伏しながら西方櫛形山へと続いている。

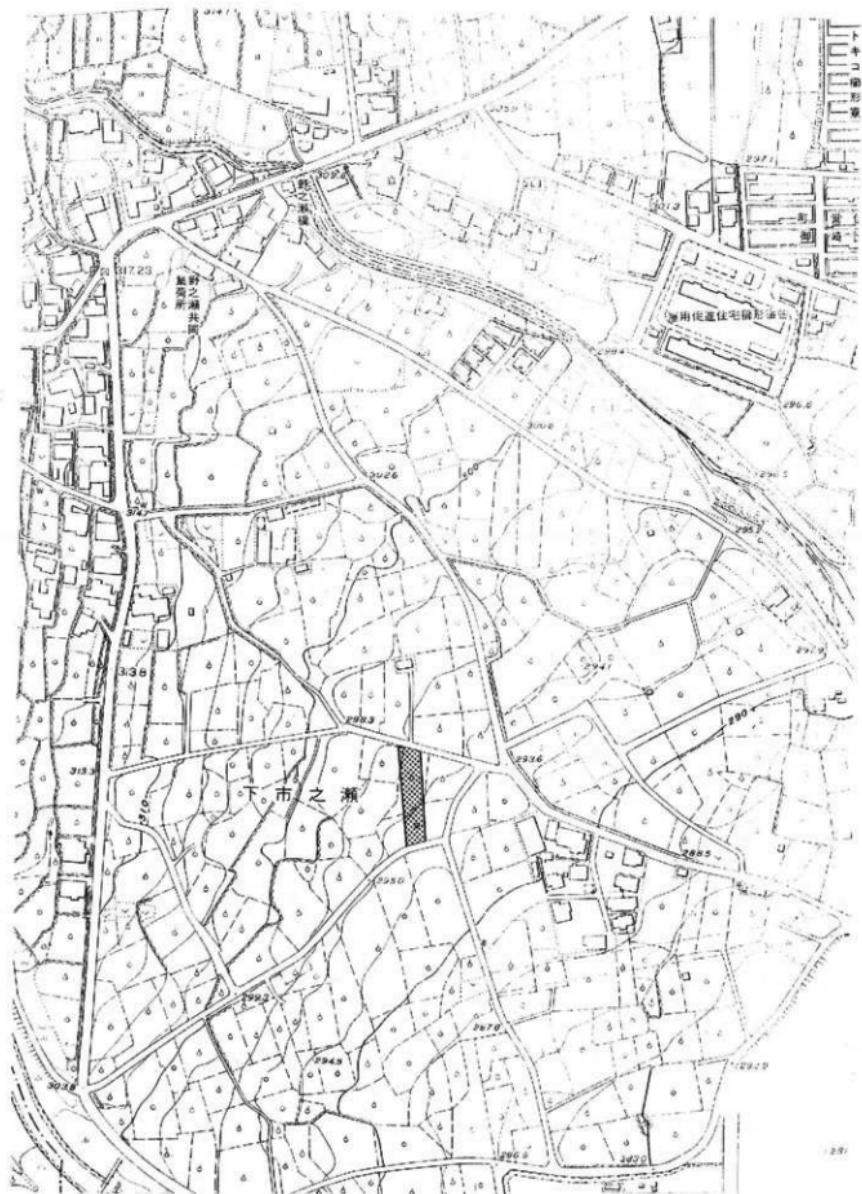
台地上面には、北から高室川、深沢川、市之瀬川等が流れ、その他の小沢と共に、この台地を幾つかの尾根状の小丘陵に分かれている。これらの櫛形山を水源とする諸河川は、ふだんは水量が少ないが、一旦大雨になると上流から大量の土砂を削り出し、盆地床に至ると急激に水流を弱め、谷の出口から扇状地を造る。

これらの扇状地は、御勅使川の造る扇状地と相まって複雑な「複合扇状地」を造っている。櫛形町の東半部はまさにこの扇状地の上にのっているため、地下水位の低い干害を受けやすい水田經營に不適な地勢となっている。現在の土地利用の状況をみても、本町東半部は、ほとんど果樹園などの畠地であり、僅かに台地を削る小河川縁辺に小規模な水田が認められる程度である。ちなみに、水田地帯は本町より低位の若草町から甲西町に弧状に連なる湧水列を境にして始まり、釜無川の沖積地で本格的になる。

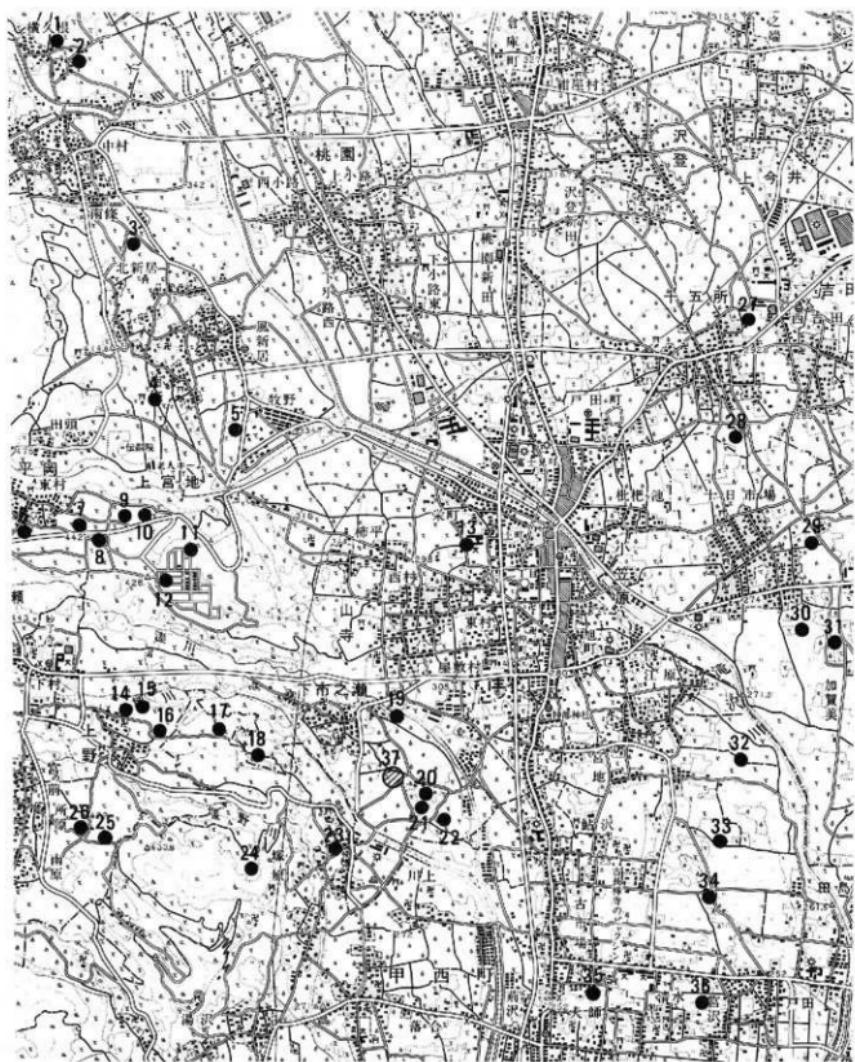
鎌物師屋古墳は、本町下市之瀬の扇状地上にあり、標高は295mで、ほぼ扇央部に位置している。この扇状地は、市之瀬台地中央を流れ下る漆川の造った扇状地で、下市之瀬字川上道上、川上道下、メ木、切付、狹塚から本町小笠原字下河原などにわたるものである。南縁部には坪川が流れ、同川の造った扇状地と複合し、甲西町塚原字塚原、中田へ続いている。扇頂部の構高は310~300m、扇端部の標高は290~280m、比高差は20~30mを測る。南北1.5km、東西1km程の小規模な扇状地であるが、堆積土砂は粗く、砂礫の多い土地である。扇状地西縁は下市之瀬断層崖を経て、市之瀬台地（上野山丘陵）へと続いている。また北及び東側は、滻沢川、御勅使川の造る複合扇状地と連なり、南側では、甲西町湯沢、鮎沢などの湧水列へと続いている。

2. 周辺の遺跡

櫛形町内では現在245ヶ所の遺跡が確認され、その年代は先土器時代から近世にわたっている。山地では高原や伊奈ヶ瀬付近に縄文時代の遺跡が知られている。市之瀬台地上では全時代に亘って多くの遺跡がみられる。古くは、明確な造構は併なわないものの、先土器時代の遺物も発見されている。しかし、なかでも縄文時代中期及び弥生時代終末の集落遺跡を中心として多くの遺跡が密集している。それらの中で発掘調査を受けたものとしては、六科丘遺跡¹⁾（弥生時代）⑩、長田口遺跡²⁾（縄文・弥生・中世）⑦、上の山遺跡³⁾（縄文・弥生・中世城館）⑮古屋敷遺跡⁴⁾（縄文）⑯などがあげられる。また台地先端の円頂丘上には、前期古墳が並んでいる。台地の扇状地では、弥生時代以降の遺跡が多くなるが、円錐形土偶が発見された下市之瀬の鎌物師屋遺跡⁵⁾⑪は縄文中期、平安前期の有数な遺跡である。さらに東へ進んで湧水列線上では、住吉遺跡⁶⁾⑯、清水遺跡など弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡が顕著となる。また甲西バイパス建設に伴う発掘調査によって、甲西町から若草町にかけて、新居道下遺跡、二本柳遺跡、油田遺跡など古代から中世にかけての水田跡や、祭祀跡などの多くの遺跡が発掘されている。櫛形町の東半部を占める扇状地上では、從来、その地勢的な関係から目立った遺跡は発見されていなかった。しかし、十五所遺跡⁷⁾⑯、村前東遺跡⁸⁾⑯など甲西バイパス関係の調査によって、厚い扇状地堆積土の下から、弥生期の水田や、方形周溝墓などが発見され、新たな知見をもたらしている。



第1図 遺跡周辺地形図 (1/3,000)



1. 北原 A 2. 北原 B 3. 北峰 4. 脊崎古墳 5. 曾標 6. 中烟 7. 長田口 8. 長田 A
 9. 東原 A 10. 東原 B 11. 六科丘古墳 12. 六科丘 13. 小笠原氏館跡 14. 椿城跡 15. 上の山 16. 上野
 17. 上ノ東古墳 18. 物見塚古墳 19. 狐塚古墳 20. 川上道下 21. 貨物卸場 22. メ木 23. 上村古墳 24. 廿喰場
 25. かに原 26. 古屋敷 27. 十五所 28. 村前東 A 29. 新居道下 30. 二本柳 31. 福寿院跡 32. 向河原
 33. 油田 34. 中川田 35. 住吉 36. 大師東丹保 37. 銀物跡古墳

第2図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 [1/25,000]

さて、台地先端の円頂丘上には幾つかの前期古墳が並んでいることは前にも述べた。鎧物師屋古墳の西方には、約80m程の比高差をもつ上野山丘陵が存在するが、その先端の尾根上には物見塚古墳¹⁸が築かれている。昭和56年に実施した調査によれば、全長46mの前方後円墳で、粘土廓を内部主体とする可能性が高く、鏡・剣などが副葬されていた。5世紀初頭には築造されたもので、釜無川以西では唯一の前方後円墳である。物見塚古墳を西に進んだ甲西町上野山には上ノ東古墳¹⁹が築かれている。規模・内容とも不明であるが、5世紀代後半には造られたものであろう。上野山からは谷を隔てた北側の六科丘にも六科丘古墳²⁰が存在する。六科丘遺跡調査時に発見されたもので、径26m程の造り出しを有する円墳である。内部主体は既に存在しなかったが、剣・須恵器などが出土し、5世紀の第4四半世紀のものと思われる。六科丘から更に北へ進んだ伝嗣院の台地縁にも御崎神社古墳が存在するが、規模・内容とも明確ではない。一方、物見塚古墳から南へ進んだ塚原山にも、かつて「刃塚」と呼ばれた古墳²¹が存在したが今は消滅している。

鎧物師屋古墳の周辺には、狐塚、塚原という字名が残っていることからもうかがえるように、かつて多くの古墳が存在していたと伝えられている²²。現在残っているものは、狐塚古墳²³、上村古墳²⁴の二基のみであるが、かつてはかなりの数の後期群集墳が存在していたと予想される。現在でも多くの石塚が残っており、積石塚古墳とも想定されていた。鎧物師屋遺跡、メ木遺跡²⁵等の調査の折にも20基を上回る石塚に対して試掘調査を実施したが、すべて近代の耕作に因るものであった。

第Ⅲ章 調査の概要

1. 鎧物師屋古墳（第4・5図、図版1・2）

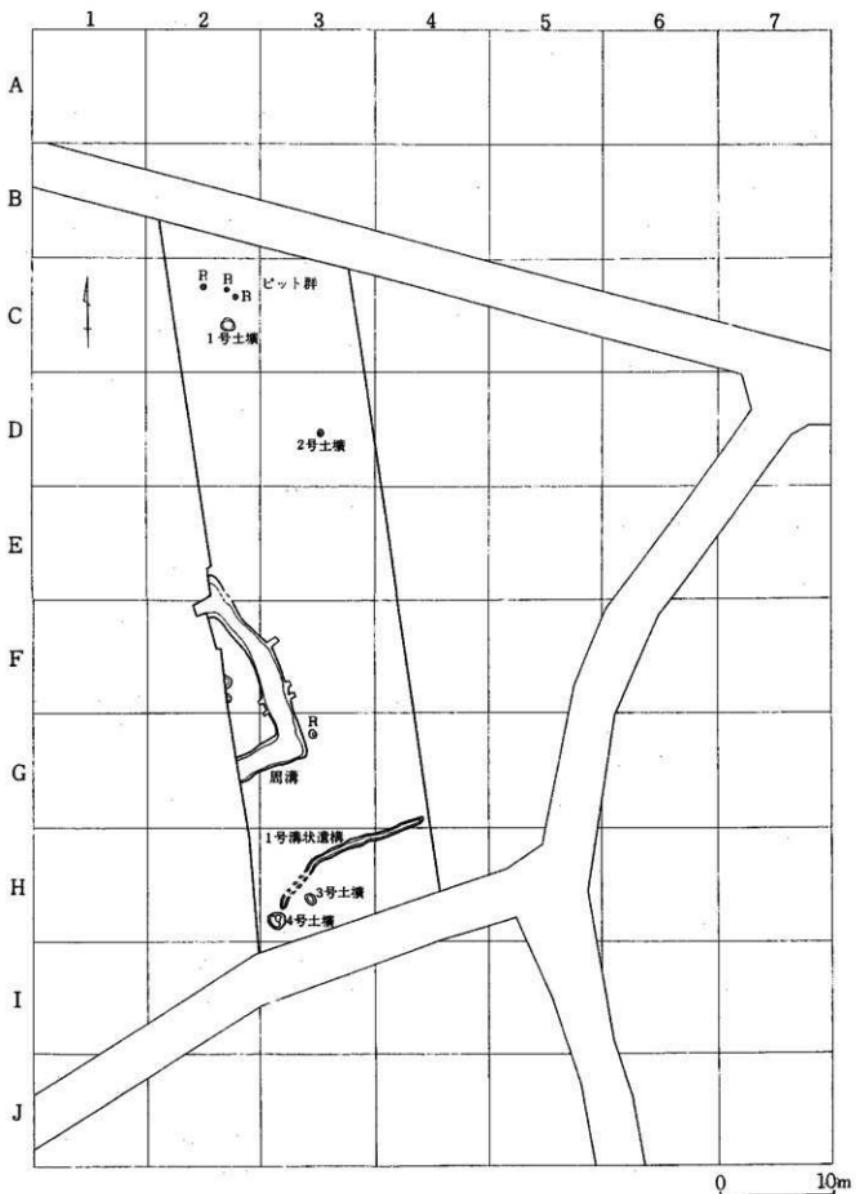
a. 形状と規模

先にも述べたように、本古墳は昭和29年に破壊されている。現状ではその跡地が畠の区画として残されており、径20~30mの不整円形を呈していた。今回、道路敷地となった部分はその東半部約1/3程であり、当初から周溝、石室掘方を期待しての調査であった。耕作土を掛けた段階で、黒色土を覆土とした墳丘東半部周溝を確認した。後期群集墳ということもあって、円形になるものと想定して掘り進んだが、周溝はやや丸味を帯びながら直線状にのび、南東隅部は直角に折れ、西へ進んでいた。また北東隅部も、ちょうど発掘区外へ移るところであったが、周溝内壁の状態などから直角に西へ折れているものと判断した。周溝の長さは外周18m、内周12mを測る。周溝の深さは20~30cm、巾は2~2.5mで上部はかなり削平されたものと思われる。従って、この古墳の形態は昭和29年時の調査所見とは矛盾するが方墳であった可能性が高く、規模は一辺12~18mと思われる。

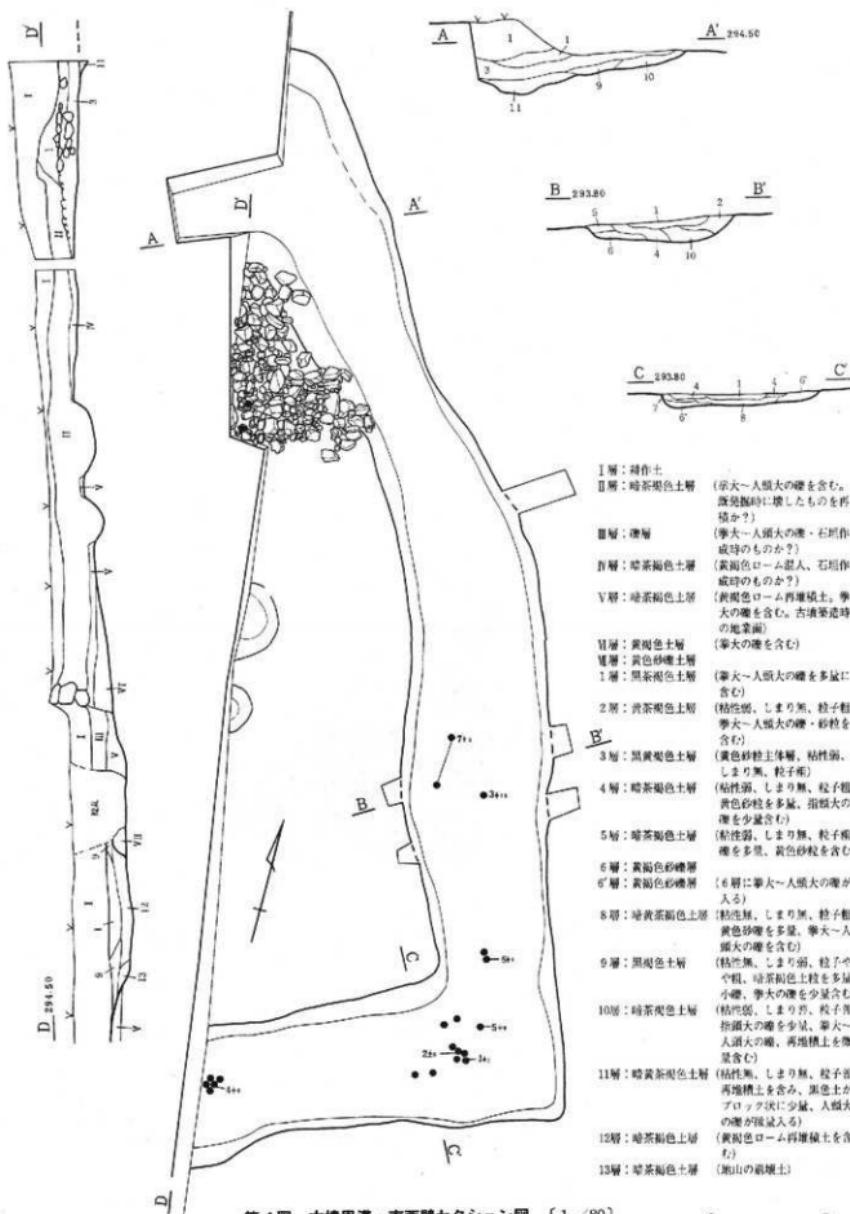
b. 内部構造

墳丘部は全く削平され、古墳築造時の旧地業面もごく一部で確認されたにすぎない。北東隅から石組状の遺構が検出された。20~30cm程の角礫を列状に配し、列の内側には10~20cm程の礫を充填している。列の長さは1~1.5m程しか遺存していない。列間の間隔は20~30cm程で墳丘内側（西側）の列と中央の列との間隔がせまく、中央と東側の列の間とがやや広い。一番内側の列は2段に積み上げられているが、上段は西側へやせり出している。現状では、東西2m、南北2.5m程しか確認できなかったが、石組南側は確認面がかなり乱れており、本来南へ延長していた可能性が強い。また石組として確認した部分の北1/3程は崩れて散乱した部分であった。この石列の方位は、ほぼ南北に従っているが、周溝の方位に対しても25度東へ振れている。検出時の状況、石組の状態などからは、内部主体の控穀の外周部とも考えたが断定するには至らない。

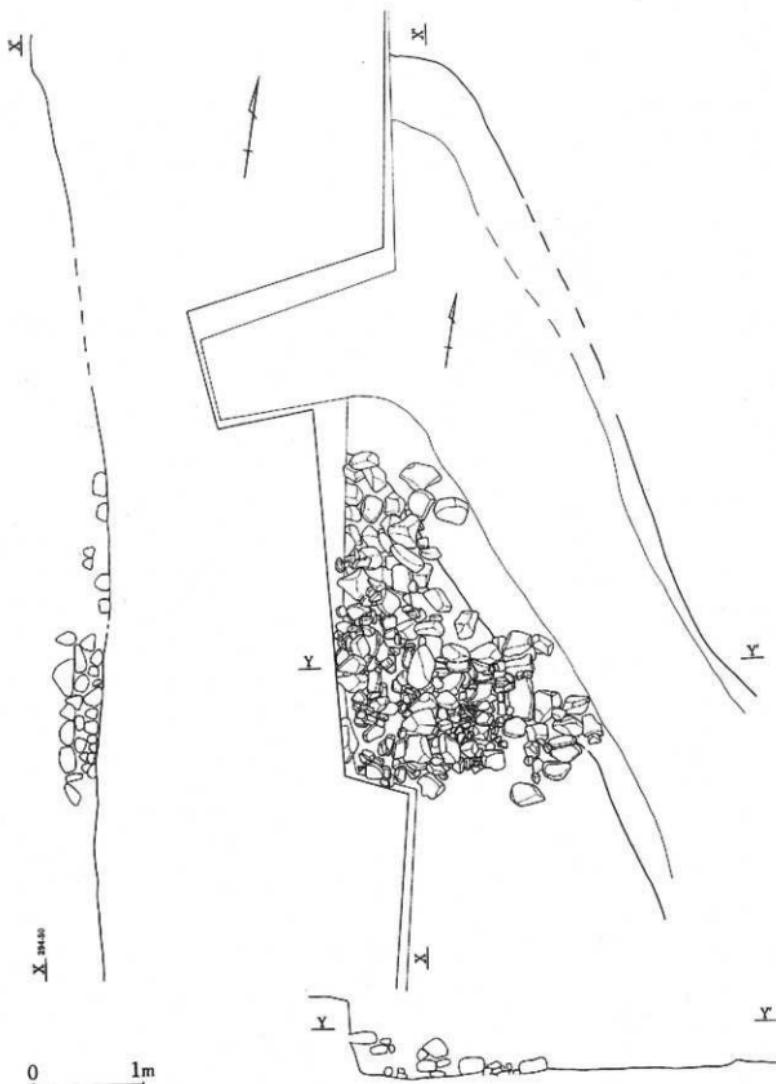
石組から2m程南には、径1mと径60cm程のピットが南北に連なって存在する。深さは両者とも10~20cm程を測る。しかし古墳築造時の地業面と思われる暗茶褐色土層を切って上位から掘り込まれており、後世の擾乱の可能性が高い。



第3図 遺跡全体図 [1/450]



第4図 古墳周溝・南西壁セクション図 [1 / 80]



第5図 石組 [1/40]

2. 出土遺物（第6図、図版2）

- 総数20数点の遺物が出土しているが、図示したものは11点である。
1. 土師器。高坏。接合部径4.2cm。現高7.8cm。色調は淡褐色を呈し、焼成はやや甘い。胎土は緻密であるが砂粒が入る。颈部はナデ。身込み部には、わずかにケズリが残る。脚部外面はケズリのちナデで下部にケズリが残る。同内面上部はヘラ状工具によるシボリ。下部はナデ。脚部が下部でやや広がるタイプである。
 2. 土師器。高坏。接合部径5.6cm。現在高7.6cm。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は普通。胎土は細砂粒を含み密である。身込み部はナデ。脚部外面は縦方向のヘラナデ。同内部上半はヘラ状工具によるシボリ、同下半はナデである。
 3. 土師器。高坏。接合部径4.5cm。現在高6.1cm。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は良好。胎土は細砂粒を含み密である。脚部外面はヘラナデのちナデ。同内面はヘラ状工具によるシボリ。
 4. 須恵器。壺。口縁部径10.1cm。頸部径3.1cm。色調は淡青灰色。焼成、胎土ともに良好。内外面ともに回転ナデである。段部は甘い作りで、口縁部も大きく外反して立ち上がる。
 5. 6. 須恵器。壺口縁。共に灰白色を呈し、焼成、胎土共に良好である。5は口唇部にわずかに自然釉がかかる。
 7. 8. 須恵器。甕。ともに灰白色を呈し、焼成、胎土ともに良好である。両者とも緑色系の自然釉がかかる。外面は平行タタキ目、内面はオサエである。
 9. 須恵器。蓋。黒灰色を呈し、焼成、胎土ともに良好である。内外面ともに回転ナデ。
 10. 楕文式土器。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好、胎土も細砂粒を含み密である。内外面ともにナデのち丁寧なミガキを施している。中期所産の深鉢の口縁無文帯の部分であろう。
 11. 中世陶器。色調は黒色を呈する。胎土は極めて緻密で焼成も良好である。外面は丁寧にミガキが施されている。
- 1～7は古墳周溝から出土し、3・7以外は同底部直上から出土している。8・9は石組上部に散乱していたものである。10・11は、今回の発掘区の一括遺物である。

3. 周辺の遺構

今回の調査は、鎌物師塚古墳を中心に南北60mにわたって実施した。古墳の周囲からは、溝状遺構1本、土塙4基、ピット4ヶ所が発見された。以下、順次説明を加えたい。

a 土塙

1号土塙 発掘区北端部のC-2区に位置する。平面不整円形を呈し、径1～1.2m、深さ20cmを測る。皿状の断面形を示し、底部は凹凸に富む。

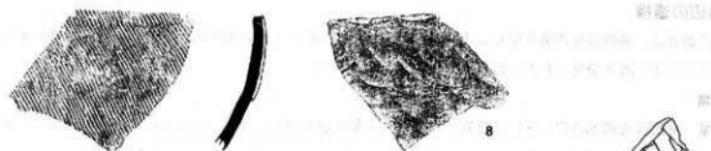
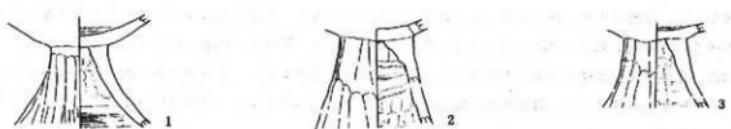
2号土塙 発掘区北半部のD-3区に位置する。径50～60cmを測る集石土塙で、平面形はやや南北に長い楕円形を呈する。深さは40cmを測りボール状の断面を示す。礫は10～20cmの大きさで土塙底面に貼り付けられた状態であった。覆土には炭化物を多量に含んでいる。

3号土塙 発掘区南端のH-3区に位置する。1×0.9m程の楕円形平面を呈し、深さは20cmを測る。断面は洗面器状を呈する。

4号土塙 発掘区南端のH-3区に位置する。平面形は丸味を帯びた五角形を呈し、規模は1.5×1.3mを測る。深さは50cm程で東半部が一段深くなる。この土塙はほぼ東西の延びてきた1号溝の延長線上に掘り込まれており、位置的に何らかの関係を持つものとも思われる。

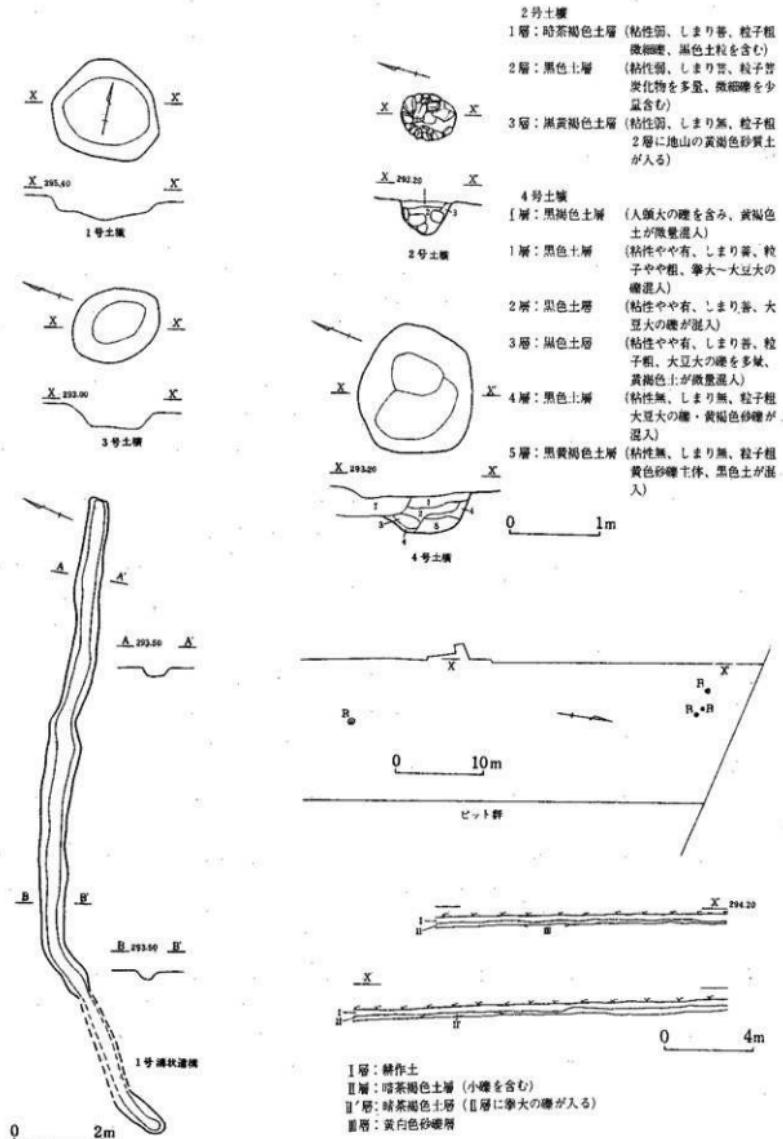
b 溝状遺構

発掘区南端のH-3区からG・H-4区に位置する。ほぼ東西に直線状に延び、緩く折れ曲がって南東に向きを変える。長さ14m、幅40～60cm、深さは20cm程度である。この溝の延長線上40cm程には4号土塙が存在し両者は接続していたものとも考えたが、この西端部はかなり削平を受けている箇所のため明確にしえなかった。



0 10 cm

第6図 出土遺物 [1 / 3]



第7図 土壠・溝状遺構・ピット群・北西壁セクション図 [1/50・1/100・1/500・1/200]

c. ピット群

計4ヶ所のピットを検出した。発掘区北端部には3ヶのピットが列状に並んでいた。

第1表 ピット規模 長×短 深(cm)

P ₁ : 60×50 20	P ₂ : 40×40 25	P ₃ : 45×40 40	P ₄ : 80×70 35
---------------------------	---------------------------	---------------------------	---------------------------

第IV章 まとめ

今回の調査は、たびたび述べた様に昭和29年に破壊された古墳の再調査であった。また本古墳は現状ではその跡地が畠の区画として残されていた程度で、しかも今回調査対象となった部分はその東半部約1/3であったため、当初から古墳の何らかの痕跡一周溝、石室掘方などを期しての調査であった。調査においても、本墳はかなり徹底的に削平されていたため当初期待していた石室の概要を把握する事も不可能であった。しかし、これまで述べたように古墳の形状・規模・時期など多くの貴重な新しい知見を得ることができた。以下、簡略的にまとめてみたい。

調査の結果、周溝が明らかにされたことによって古墳の規模、形状が明確にされた。古墳の規模は現状では墳丘が一辺12mで、周溝幅まで含めると同18mとなる。しかし築造面の削平が激しかったことから周溝ののり面を考慮に入れると、原寸法では墳丘はやや小さく、周溝を含めるとやや大きくなると予想される。この数字は、昭和29年調査の甘利氏の数値ときほど矛盾しないであろう。古墳の形状は、周溝から方形であることが明らかになった。これは周溝の南東、北東の両隅部がきれいに直角に折れて確認されたこと、同東辺が多少蛇行はするもののほぼ直行することによる。これは予想外であったため、北東隅部など多少発掘区外まで掘削をひろげ確認作業をおこなった。古墳からは周溝を中心に多少の土器片を得ることができた。数量的には僅かであったが、土師器の高杯・須恵器など古墳築造年代の推定に一定の資料とすることができた。特に須恵器は6世紀の後半代の所産で、出土位置が周溝底部であり供獻品であろうことを考慮にいれても、本古墳は6世紀の第4四半世紀には築造を終えていたと推定される。

ところで、内部主体については前回の調査において、入口を南面する横穴式石室で、石室羨道入口幅2.4m、玄室長4.6m、奥壁幅1.35mを測り、側壁には内面平らな50cmから1m余りのものを用い、床は10~15cm径の玉石を敷き、その上に小礫が厚さ10cm程敷かれていたことが明らかにされている。おそらく石材を横口に積み、かなり丁寧に造られた石室であったと考えられる。しかし、今回の調査では残念ながら新たなる知見を加えることはできなかった。墳上東北隅から3列に並んだ石組を検出し、石室控積みの一部とも考えたが、石列の主軸が古墳主軸と微妙にずれていたこと、また石列と周溝北辺との位置関係が近すぎるなど否定的な要素が多くあった。けれども、石組が古墳築造時の地業面と考えた第4層にのっていたこと、石組内部の土が古墳削平後の土とは違うことなど、この石組が古墳に伴う可能性も強く、今後の課題としたい。

最後に再度まとめると本古墳は径12m程の方墳で、横穴式石室を内部主体とする6世紀後半代に築造されたものであった。

本古墳の周辺は、字名や地域の伝承、若干の遺存古墳などから群集墳が営まれた地域とされてきた。しかし遺存古墳がわずか2基であり、しかも開口しているものも未調査の1基（上村古墳）のみであったことからその詳細は不明のままであった。今回の調査によって古墳群の内容・築造年代などに僅かであるが解明の糸口をあたえたものとなったといえよう。同時に現在もこの古墳群の一部が未だ地下に埋没している可能性を窺わせる点でも今回の調査は意味あるものといえる。

ともあれ、6世紀の後半代を中心に、この甲府盆地西縁の地にも群集墳を営む勢力があったことは再確認したものといえ、この地域に止まらず甲府盆地全体の古代史を考えるうえでも貴重な資料となろう。

引用・参考文献

- 註1 櫛形町教育委員会 1985 櫛形町文化財調査報告No-3『六科丘遺跡』
- 註2 山梨県埋蔵文化財センターにて平成3年度に調査
- 註3 櫛形町教育委員会 1985 櫛形町文化財調査報告No-2『上の山遺跡』
- 註4 櫛形町教育委員会 1995 櫛形町文化財調査報告No-14『古屋遺跡』
- 註5 櫛形町教育委員会 1995 櫛形町文化財調査報告No-15『鉄物師屋遺跡』
- 註6 甲西町教育委員会 1981 『住吉遺跡』 住吉遺跡調査団
- 註7 櫛形町教育委員会『櫛形町誌』 櫛形町誌編纂委員会
- 註8 山梨県埋蔵文化財センター 1994 『村前東遺跡現地説明会資料』
- 註9 櫛形町教育委員会 1983 『物見塚古墳』 物見塚古墳環境整備調査委員会
- 註10 吉岡弘樹 1987 『甲西町上ノ東古墳地形測量調査の概要』『山梨県考古学協会誌』創刊号 山梨県考古学協会
- 註11 註1に同
- 註12 甲西町教育委員会『甲西町誌』甲西町誌編纂委員会
- 註13 註7、註12に同
- 註14 註12に同
- 註15 櫛形町教育委員会 1987 櫛形町文化財調査報告No-5『メ木遺跡』

報告書抄録

ふりがな	いもじやこふん						
書名	鉄物師屋古墳						
副書名	櫛形町道5号線開設に伴う埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ名	櫛形町文化財調査報告	シリーズ番号	No	11			
編著者名	清水 博						
発行者	櫛形町教育委員会						
編集機関	櫛形町教育委員会						
所在地	〒400-03 山梨県中巨摩郡櫛形町小笠原397-1 TEL 0552-82-0108						
発行年月日	1994年 3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
いもじや 鉄物師屋 古墳	山梨県中巨摩郡 櫛形町下市之瀬	193909	35度 35分 47秒	138度 27分 39秒	1993.11.04 ~ 1993.12.03	800	町道櫛形町5号線 開設に伴う調査
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
いもじや 鉄物師屋 古墳	古墳	古墳時代 (後期)	周溝	土師器・須恵器	方墳		



遺跡遠景



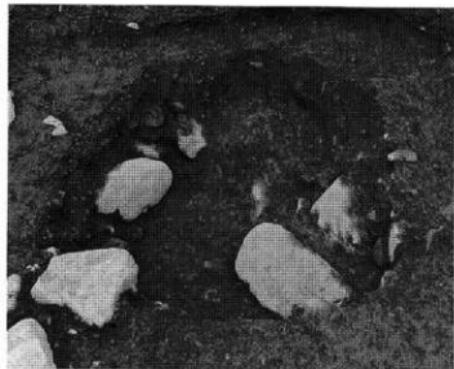
石組（東より）



石組（北より）



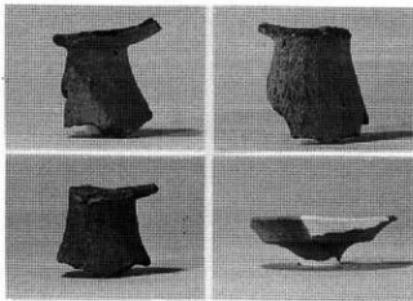
周溝(南部)



4号土壤



一号溝状遺構



出土遺物

柳形町文化財調査報告 No-11

鑄物師屋古墳

1994年 3月20日印刷

1994年 3月31日発行

編集・発行 柳形町教育委員会

山梨県中巨摩郡柳形町小笠原397-1

印刷 野中印刷

山梨県中巨摩郡柳形町小笠原
